



連載 I
あの町この町
第60回

紅花今昔——宮城県・村田町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト―著者)

仙台で新幹線から東北本線に乗り換えて南へ向かった。大河原駅が近づき、降り支度をしていて、窓の外に目がとまった。線路にそって川が流れている。流れるとも見えず細長い沼のようだが、しかしゆるやかに水が動いていることはわかった。岸辺は一面の草地で、その中を水が白い帯を引いている。川霧がうつすらとかかかっており、茫漠とした風景である。スケールは小さいが、なにやら北欧の田舎を旅している風情なのだ。

川は白石川。堤の桜並木が有名で、やがて両岸に見えてきた。スピードを落とした列車に寄りそい、かなりの長さにわたってつづいている。町並みが近づいて、ハタととどえた。

村田町行のバスまで一時間あまりある。ふつうはヤレヤレとなるのだろうが、私にはいつも「しめた」である。その間、駅のまわりをウロつける旅のたのしい付録というもので、足の向くまま歩いて、予期しない見つけものがありついたりするものだ。このついでに、このときの発見を報告しておく、ちかくの寺で行きあった二つの石碑。ともに大河原生まれの人を顕彰していて、一つは浅草宇一郎といい、明治初年の戊辰戦争の際、仙台藩士を手引きして、悪名高い官軍参謀世良修蔵を捕縛、処刑した。新政府は世の評判になるのを恐れて公表せず、宇一郎は七十五年の生涯をまっとうした。まんまと権力のウラをかいたわけだ。

もう一つは高山開治郎といって、若くして上京、経済新聞を興して成功した。大正十二(一九二三)年、郷里に桜樹一〇〇〇本を贈り、白石川河畔に植樹した。「一目千本」といわれる名所は、この人にはじまる。もどり道に遠まわりして土堤を歩くと、思うさま枝をのびし、黒い幹にたくましいコブコブのある古木が悠然と居並んでいた。白石川は日本の川には珍しく水の流れがゆるやかで、橋に立つと、足下に広大な水の鏡がひろがっていた。

駅にもどると、バス停にお目当てのバスが待っていた。そのあとこのともよく覚えているが、「村田中央」のアナウンスでバスを降りると、背広に黄色いヤッケをはおった人が待っていた。

「ようこそ、ようこそ」

べつに連絡していたわけではないのに、ニコニコ顔で迎えられた。そのまま観光案内所へ案内され、パンフレットを手渡され、説明がはじまった。こちらは身はともかく心はまだ「村田町モード」に入っていない、キョトンとして黄色いヤッケの横につっ立っていた。

「県で初のジュウデンケンです」

「ジュウデンケン？」

ハッピーのようなヤッケに「村田みらい会」と染めつけてある。いただいた「みらいだより」第10号に「祝」の字と「選定」が赤字で強調して

あつて、ちかく選定記念シンポジウムが開催される。そのうちやつとジユウデンケンが「重要伝統的建造物群」の略語だとわかった。かねがね保存地区としての選定を申請し、運動していたところ、努力が実り、今年（二〇一四年）九月、正式に官報に告示された。

「大地震が幸いました」

「……。」

これも問い直して、はじめてわかった。「店蔵」とよばれる伝統的な建物が東日本大震災で大きな被害を受け、取り壊しがあいついでいた。申請を受けた文化庁はそんな状況を見て、お役所仕事には珍しく急ぎ調査にとりかかり、半年で正式決定。町の知恵者が不運をバネに成果をつかみ取ったわけで、運動を担ってきた人たちの説明にも力が入るといふものである。

そんなことはつゆ知らずやってきた。本町から荒町。一時間もあれば一巡できるらしい。村田町に独特の店蔵につき、念入りにコーチを受けたので、きれぎれの知識を実物で確認するぐあいである。仙台の南を「仙南地方」というが、江戸のころ当地は紅花で栄えた。山形の最上地方のことは聞いていたが、もう一つ仙南の地が特産地で、品質の点で評判をとり、京方面へ高値で取り引きされていたとは知らなかった。

キク科の二年草で、アザミによく似た花をつける。紅花は染料や口紅の原料として貴重な品だった。栽培に適した土壌が必要で、最上と仙南が群を抜いていた。栽培のかたわら、花を「紅餅」に加工する技術と、生産者から集荷して京・江戸へ運ぶ物流のネットワークを持たなくてはならない。山形には最上川と酒田港という物流の道があった。仙南地方に気づかなかったのは、生産につくもう一つの条件が見えなかったからである。

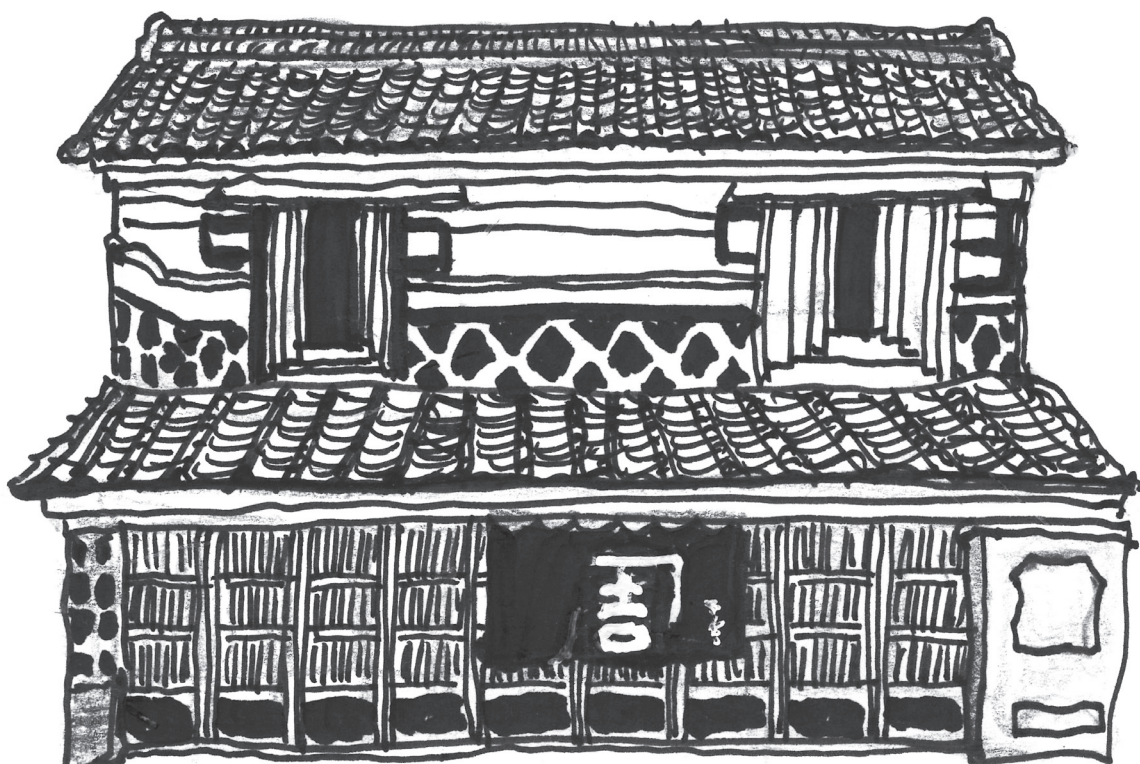
仙南の地は刈田郡、柴田郡、伊具郡から成り、そのほばまん中を白石

川が流れている。村田町に山形自動車道（国道286号）と東北自動車道のインターチェンジのあることからわかるが、山形、仙台、さらに福島と結ぶ街道の宿場町だった。白石川のゆるやかな流れは舟運に打ってつけだし、街道の結節点は物流のセンターでもある。村田商人は富を蓄え、豪奢な町並みをつくりあげた。

店蔵にはほぼ一定のスタイルがあったようで、表通りに面して店をかまえ、裏手に主屋、屋敷神をはさんで土蔵が並び立ち、裏通りに達すると接して表門がつき、まっすぐの長い通路が裏通りと結んでいる。そして通路わきに庭を設けた。あとはそれぞれが好みの意匠と装飾をほどこす。おおかたは現在も使われていて、中をのぞくわけにはいかないが、外まわりからでも見てとれる。重厚な土蔵造り、粋なナマコ壁、観音びらきの扉窓に見る壁の厚さ、屋根の雄大さ、それは鬘斗瓦積みとよばれる独特の積み方によるらしい。表門にも薬医門、腕木門、木戸門などどちがいがあがる。軒に小屋根つきの庵看板をつき出した、通路を埋めた石畳。カネシヨウ、ヤマジユウ、カネキチ、マルサ……。屋号を商標にした豪商が丹誠と富をこめた建物なのだ。それがズラリと、一〇〇年の歳月をくぐり抜けて立ち並んでいる。

表からではわからないが、裏通りにまわると敷地の大きさが見てとれる。取り壊された屋敷跡が長細くのこっているが、二本の平行線が長々とのび、表通りで点になるぐあいなのだ。主屋の背後の蔵にしても、内蔵、中蔵、西蔵、味噌蔵、塩蔵と用向きをちがえて並び立っていた。蔵跡がわずかに礎石をとどめている。調査に来た文化庁の役人は、ありし日のスケールを思い浮かべながら、選定を急いだのではなかるうか。

蔵通りの西かたが、かつて代官所の置かれていた高台で、麓に待屋敷、つづいて商人町、工人町。北の山ぎわに氏神さまを祀る白鳥神社。村田町はいまなお江戸の町割りを、そっくりきちんとのこしている。旧武家



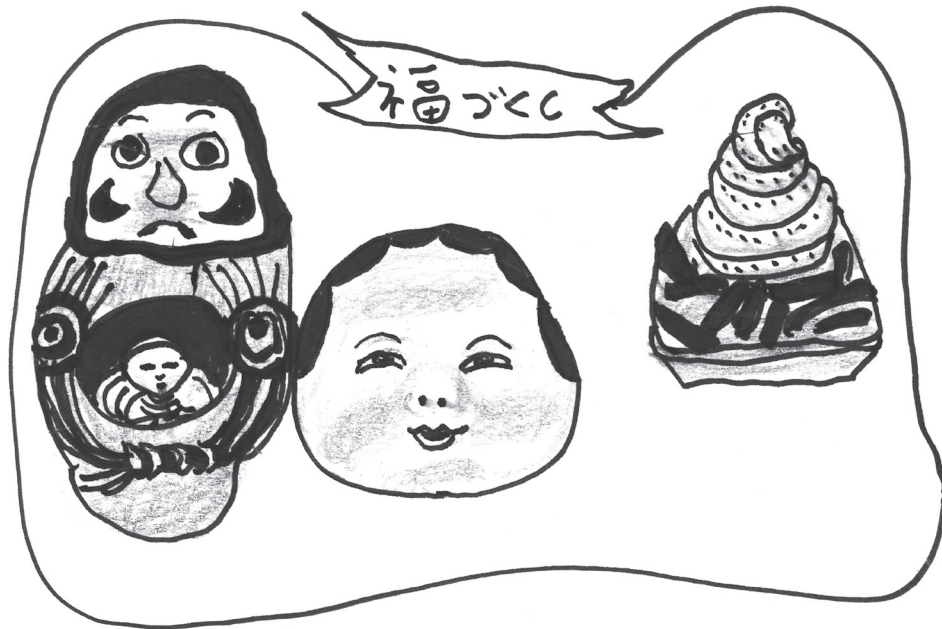
店蔵カネキチ

屋敷エリアのゆったりとした作り。町役場の裏手は城山公園で、一方には広い草地在り、もう一方に歴史みらい館と道の駅村田が控えている。過去と現在を仲のよいコンビのようにして配置した。

その過去のエリアで「福づくし」と対面した。弁財天、恵比寿・大黒天、福祿寿、弁財天のお使いの蛇の像、転んでもすぐに起き上がる達磨さん。その名に福を煮つめたようなお多福。村田商人たちは現世利益の商法を徹底させたようで、神もまたすべて福がらみである。紅花の栽培は連作障害が強く、土壌の手入れや肥料は経費がかかった。花つみや千花(花餅)の作業は人手を要した。村田商人は農家に金融支援をして、現物返済の方法を採った。生産者と強い結びつきをつくって効率を高めたらしい。

豪家の一つは越前から移ってきた。紅花は扱った主要な商品の一つであって、京・大坂でさばくと、上方の商品を仕入れてきて仙南で売る。近江商人が得意にした「てんびん商法」がこの地でも生きていた。街道が合わさる宿場町には、いち早く情報もちこまれる。店蔵の大半が明治前期から大正時代に建てられており、明治維新という激動期を無事くぐり抜け、さらに活発に経営を展開したことが見てとれる。紅花に人工製品があらわれ、舟運に鉄道がとって代わって以後、華麗な富の町はお伽噺の眠り姫のように百年の眠りについた。

新旧が適度にまじり合い、その大きさ、あるいは小ささが人間の尺度に応じている町は、町歩きが快適だし、歩いても疲れない。ノレンに染めつけた屋号のマークが、はじめは謎の記号のようだが、そのうちヤマ、カネ、カク、マルなどに一字ないし数字を組み合わせるつくり方がわかってくる。現在に生きる家族の家であれば旧のままというわけにはいかない。生活のための改造、増築を加えつつ町並みの雰囲気はこわさないのは、並み大抵のことではない。重伝建に選定されると、建物の修復には国や町の補助があるかわりに、新築や改築などに制限が課せられる。



ときには工事差しどめにあう。町当局、また市民の手腕の見せどころだろう。福の神だけでなく、知恵の神さまの出番になる。

蔵造りがそのままカフェになっていて、コーヒーをいただきながら、ひと休み。デジタルカメラをもとっていくと、「もう一つの目」の記憶したものが映像としてあらわれる。生身の目ではわからなかったが、鬼瓦には屋号のマークがくっきりと刻んである。庵看板の木目に「上諸白もろはく大沼屋」と浮き出ている。表門の欄間に木目を利用した飾りが入っていて、伝統的な装飾パターンを利用したのだろうが、透かし彫りをまじえ、ハツとするほど美しい。かつての棟梁たちは、百年後の姿まで想定して飾りつけたかのようだ。

電話がまだごく珍しかったころ、電話番号が地位の象徴でもあった。カネカノウの電話番号表札が高らかに「電話一番」をうたっている。ヤマシヨウが電話二番。ヤマシンこと山田邸は関東以北でももっとも古い店蔵というが、元紅花商人は現山田医院院長である。商人の店と医院をいかにして折り合わせるか。その点、聴診器のセンセイはあざやかに共存の解決法を見つけたようで、重伝建の将来に一つのヒントを提供しているのではあるまいか。

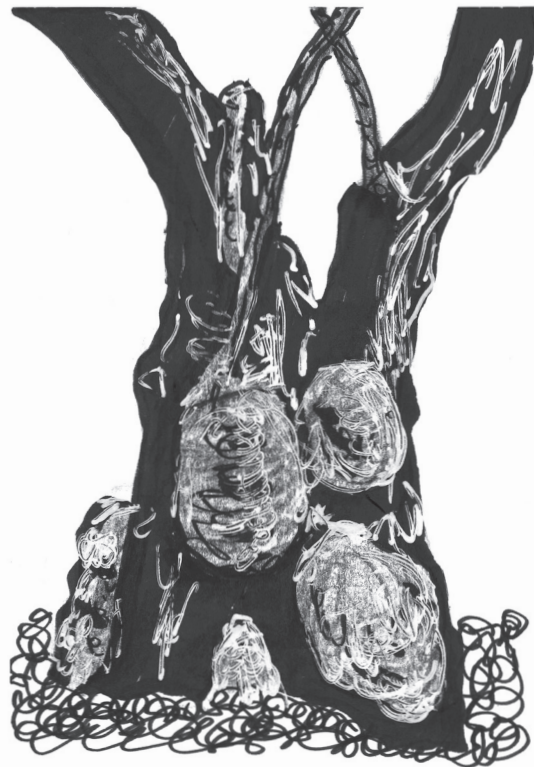
蔵通りがすぎたところの山裾の白鳥神社は、なんともたのしいところだ。まず赤い鳥居をくぐった先のフジの木が見ものである。太く、うねうねとのび、大杉に巻きついていて。幹が割れて、さながら大蛇がのび上がっている感じ。昼間ですら思わず足がすくんだのだから、夕闇のなかで見ようものなら、あわてて逃げ出したくなるだろう。つづく境内に仁王立ちしたケヤキの大木のスゴイこと。巨大な幹に人の背をこえる大きさのコブが三つ、四つとモッコリふくらんでいて、異様な獣の顔にも見える。神仏の加護を受けるのか、神社や寺の境内には途方もない樹木が根を下ろしているものだが、白鳥神社の千年ケヤキもそうである。まわりをひとめぐりして、ただただ驚くしかないのである。

拜殿前の狗犬を見て、いちどに気持がなごんだ。十センチあまりの台座にのっているだけ。それに小さなつくりなので、小犬が左右にしゃがんでいられるかのようだ。その顔も獅子とは大ちがいで、生まれてまなしの小犬そっくり。幼稚園児のようでもある。一方はおすまし顔で目を伏せ、もう一方はプイと横を向いている。

これをつくった石工は、はたして何をモデルにしたのだろう。風化ぐあいからして、相当古い狗犬と思われる。猛々しく牙をむいた獅子型はあとから加わったスタイルで、初期のものはてんでんバラバラ。石工は手本によらず、身近な小犬、あるいはわが家の幼児を手本にしたのかもしれない。愛嬌ある二体が神さびた本殿の右、左に、屈託なげにすわっていた。

村田町は町域がYの字の形をしており、左にのびた一翼には自然公園野外活動センター、谷山温泉、右にのびた菅生地区に古くからの神社や寺、民宿、自然農園、モータースポーツのコース。Yの右かたは「姥ヶ懐地区」といって、民話の残るところとして知られ、民話伝承館、水車ふるさとおとぎ苑がある。「姥の手掛け石」という不思議な石は、伝説によると、京都で渡辺綱に片腕を切り取られた鬼が、綱の伯母に化けて腕を取り返し、逃げる途中にすべって転び、手をついた跡だという。たしかに表面にくつきりと爪の跡がついている。京都は紅花取引の相手方だった。京の鬼が東北の小邑に逃げこんでいても、一向に不思議はないのである。

Yの字の下の棒にあたるのが蔵の町筋で、その南がたに学校、体育館、消防署、警察、商工会、保健センター。小さくまとまったなかに変化があつて、町としてはとても恵まれた条件をおびている。そこへ重伝建のお墨つきが出て、町おこしには鬼に金棒というものだ。オリンピックク重量挙げ金メダリスト三宅義信選手は、この蔵の町から巣立ったそう。あの小柄な英雄はバーベルにかかる際、目を伏せ、念じるような間をと



白鳥神社の縄文ケヤキ

つてから、地球の重しのような鉄輪にとりつき、裂帛れいぼくの気合でもって頭上高く差し上げた。紅花の町とあの気合の一瞬とは、何か通じ合うような気がしないでもない。どうしてそんな気がするのか、われながら不可解ながら、それはそれなりに納得できるような気がした。

バス停前にもどつてくると、黄色いヤッケの人が腕組みして立っている。お仲間がふえて四つの黄色が並び立ち、黒ずんだ土壁の前に紅花が四つひらいたようだった。

(いけうち おさむ)